



温故知新

日中文化協会ニューズレターも今回で第 250 号を数えるまでとなりました。どんな分野においても、ひとつの事を続けるということは、すごいことです。特に、それが個人ではなく、組織であるならばなおさらです。

今回、第 250 号の執筆が出来たことは、日中文化協会を創設された故上山卓司さんと上山綾子さん、そしてお二人の意志を引き継ぎ、協会を引っ張って下さっている上山伸治理事長、上山耕治編集長をはじめ、皆様からのあたたかいご支援によるものと、深く感謝しております。

これまでこの場を借りて様々な事柄について取り上げて参りましたが、皆さんに伝えたいことを整理する上で、私自身も学ばせていただくことが多くありました。ニューズレター執筆という有難い機会をいただき光栄だなど改めて思います。私の日本語も、昔よりは上達していると良いのですが。(妻や娘たちには、今でもしょっちゅう訂正されます。昨晩は魚の白身のことを「肉」と呼んだら、それはちょっとへんだよと言われました。中国語では、魚の白身も、豚・牛・鶏と同じ「肉」なのです。日本語はむずかしい…)

考えてみると、言葉というのは実に不思議です。日本語だと伝えづらいことが、中国語なら自然と言えたりします。逆もまた然り。例えば日本語では「ありがとう」という言葉を日常的に使いますが、同じような頻度で「謝謝」を使うと、中国では気味悪がられるかもしれません。日本では「親しき仲にも礼儀あり」という文化がありますが、中国では、家族や友人を助けることは、当たり前という認識があるためです。このように、人は言語を学ぶとき、必然的にその国の人々の考え方を知ることになります。どちらが正しいとか間違っているとか、どちらが上か下かなんてありません。私たちが生きていく上で必要なことは「違いを認め、受け入れること」だけです。

さて、皆さんもご存知のとおり、このニューズレター一創刊当初のタイトルは「温故知新」でした。故きを温ねて、新しきを知る。私は来日後から卓司さんや綾子さんに大変お世話になりました。オリンピックやコロナ関連の様々な情報が飛び交う今の世の中を、お二人

がご覧になったらどう思われるだろうか、と今でも考えることがあります。

この第 250 号の終わりは「日中文化協会設立の趣旨」で締めくくらせていただけたらと思います。今だからこそ、綾子さんがのこしてくださった言葉やその精神から学ぶべきことがあるのではないかと思うのです。

日中両国は二千数百年の友好往来の歴史を有する隣国です。両国は朝鮮半島や南西諸島を經由して、きわめて古い時代から往き来されていたと推定されます。特に遣隋使・遣唐使が派遣された飛鳥時代から奈良・平安時代にかけて、中国からの文化や事物が盛んにもたらされました。それ以来近世まで、中国は日本のお手本となって、平和で友好的な関係を保ってきました。

しかし近代に入ってから、不幸な歴史事情によって、中国と日本は近くて遠い国になってしまいました。その後、昭和 47 年(1972)に国交回復が実現し、政治・経済・文化などの交流が再開されるようになりましたが、相互理解の面では残念ながら未だに近くて遠い国のままです。メディアの報道に簡単に左右され、反日運動や中国不信に陥りやすいのが現状です。最近の世論調査によると、中国に親しみを感じる人が大きく減少し、反対に感じない人が大きく増加の傾向をたどっています。これは日中関係において重大な問題です。

これからの世界は計り知れない大国、中国を抜きにしては成り立たなくなるはずはです。

今この時こそ、日本人の生活と文化の先輩でもある本物の中国を勉強し、友好交流を図る必要があります。いさかきの原因の多くは文化の違いや価値観の差に起因するものが多いように思います。

そこで日中文化協会は文化交流を通じて、相互理解の促進と友好の増進に努めます。普通の日本人と普通の中国人が互いに理解を深め、異なった考え方や価値観を認め合うことができれば日中関係はさらに改善されるはずはです。(原文)

コロナ禍の大学を去る

最終講義もオンラインだった。パソコン画面の学生に向かって、私と中国との関わりを話し、学生へのメッセージを伝えた。教室で直接、熱く語りかけたかった。最終講義から数日後に中国語学科専門ゼミの女子学生が研究室を訪ねて来て、「日本と中国の架け橋になります」ときっぱり言ってくれた。教員冥利に尽きる。

今年3月で大学教員生活に別れを告げた。新聞社で30数年ジャーナリストとして勤めた後の第二の人生は10年間だった。福沢諭吉は幕末から明治を生きて「一生に二生

を生きるが如し」と記した。私も、同じ思いだ。

大学と大学院で、現代中国（政治外交・社会）、日中関係を中心に講座を担当した。基礎的事実を教えるだけでなく、中国・日中関係の重要ニュースを直ちに講義で取り上げ、その背景や事実関係を掘り下げて解説した。中国を好悪の感情で判断するのではなく、事実に基づいて理性的、知性的に見るように。単なる反中や媚中ではなく「知中派」になるようにと、説いた。受講生の中国観が好転したと実感している。

尖閣国有化問題を機に日中大学

生討論会を企画し、5年間続けた。両国の若者たちが率直に意見交換し、お互いの相違点・共通点を理解し合った。コロナ禍で日中関係は改善基調から停滞気味である。4月から「東アジア・日中関係研究所」を発足させる。東アジアの幅広い観点から日中関係を総合的に研究し、交流し、発信していきたい。

(研究所; fax 052・624・7878)

日中文化協会理事
名古屋外国語大学名誉教授
川村 範行

東海日中関係学会

ピンポン外交 50周年記念シンポジウム 名古屋ピンポン外交から半世紀の日中・米中関係

日 時：4月17日（土） 14：00～17：00
(受付 13：30～)

お問合せ先：pinpon20210417@gmail.com

定 員：会場参加 80名 / Zoom 参加 80名

申込締切：4月13日（火）

会 場：名古屋商工会議所 2階ホール
(名古屋市中区栄2丁目 10-19)

第1部 基調講演

「ピンポン外交の舞台裏～周恩来総理との会談に同席して～」 小田悠祐氏 (元後藤鉦二日本卓球協会会長秘書)

第2部 討論

「名古屋ピンポン外交から半世紀の日中・米中関係を考える」
コーディネーター：川村範行氏 (東海日中関係学会会長)

参加方法：会場参加 / オンライン参加

参加費：(会場参加のみ) 一般 1,000円

学生無料 (共催・後援団体会員無料)

※申込方法は同封の資料をご参照ください。

漢方教室 123 ふしぶしが気になる方に

40歳を過ぎたころから年齢を感じ始めるのは、足腰がつかなくなりやすくなるからとされています。最近テレビなどで注目されているのは非変性Ⅱ型コラーゲンや非変性プロテオグリカンです。これらの軟骨成分は年齢とともに減少していきます。いつまでも友人や家族との外出を楽しむためには、非変性Ⅱ型コラーゲン、非変性プロテオグリカンを補うことが重要です。

【非変性Ⅱ型コラーゲン】

非変性Ⅱ型コラーゲンとは、性質が変性（壊れていない）していない

コラーゲンのことで、関節軟骨の構成でもっとも大切な基礎（土台）の役割をしています。

【非変性プロテオグリカン】

年齢を重ねるにつれ、つらくなる原因は、加齢によるプロテオグリカンの再生能力の減少だと考えられています。非変性Ⅱ型コラーゲンとは、性質が変性（壊れていない）していないプロテオグリカンのことです。

皮膚や軟骨など体内に広く存在しており、軟骨に弾力を与えたり、新し



い細胞を作り出したりする重要な物質です。

日本安恵のふしぶし元気は、ふしぶしに必要な有効成分を配合したサプリメントです。着色料、添加物は使用しておりませんので、安心してご利用いただけます。



興味のある方は

052-242-3930まで。

中統ビル3階 日本安恵株式会社

中国からの引き揚げ—思い出すがままに④⑥

新1年生の剣道部入部者は10名ほどいました。指導して下さる先生は国学院大学出身四段の国語科の教師でした。先生は、学徒動員で出征され、終戦で復員し、教師とられた方でした。戦時中の過酷な戦争体験を語ることは一切なく、当時としては珍しい方でした。

我が剣道部は、2年生3名、3年生8名、総勢20名ほどの部員で成り立っていました。授業後毎日剣道場に集まり、1年生は基本のすり足、打ち込みの練習ばかりを一カ月ほど続けました。剣道場は、元は講堂で、柔道部と剣道部が共用していました。

基本の型がなんとかさまになってきたころ、あの臭い防具をつけることが許されました。単調な基本練習を終え、次のステップに進むことができた時は、正直うれしく思いました。

防具をつけての最初は、「切り返し」と言って、相手の面の右、左を交互に打ちながら前進、後進を繰り返す稽古を何回も何回も行いました。この後「面」、「小手」、「胴」を打つ練習を繰り返し行うわけです。しかし、新人の悲しさ、「小手」を打っても防具をはずれ素肌に当たる、「胴」を打ってば、防具に当たらず、直接あばら骨に当たり、痛いなの、あざだらけになりました。

杉本 克治

誕生日の人の言葉

今月で●0歳の誕生日を迎えました。人生の半分くらい終わったような気がします。心はいつでも18歳のままのつもりで暮らしています！

王 偉藝

新コーナー お便り

先月の熊織愉さんのお話「日本の小説」について、会員さんからお便りをいただきました。こちらでご紹介します。

日本の文学に親しんでおられることがうれしいです。それに比べ私は 中国の文学作品についてあまり読んでいるとは言えません。ただ魯迅の作品はだいぶ読みました。『阿Q正伝』や『狂人日記』が有名ですが 私は『ふるさと』が最も好きです。

夏目漱石の「吾輩は猫である」の小説の冒頭の「吾輩は猫である。名前はまだない。」は有名ですが、夏目漱石の家はほんとに猫を飼っていたそうです。名前はちゃんとあって、「ねこ」という名前だったと 漱石の孫が言っています。

お便りありがとうございました。熊織愉さんは日本語の教師を目指しているそうです。素敵な先生になれるといいですね。

続いて今月は趙姣姣さんです。どうぞ！

「死」から「生」を思う 趙姣姣

『湯を沸かすほどの熱い愛』という日本の映画を見たのは、祖父が亡くなったときであった。祖父にかわいがられていた私にとっては、祖父がもういないという事実をなかなか受け入れられなかった。祖父を思い出すと涙が止まらなくなってしまう日々であった。

『湯を沸かすほどの熱い愛』では、癌の末期になって余命わずかだと告げられた主人公幸野双葉が死に直面し、積極的に笑顔で残りの人生を過ごすことにした。その前向きな生き方が太陽のように他人を暖かく照らしてくれている。最後のシーンでは双葉は自身の要望で湯の窯で焼かれ、そのお湯で家族たちが暖かく浸かっていた。

映画の中で繰り広げられた一つ一つのシーンから、双葉のやさしい愛情と強い意志が描かれている。死を積極的に見る双葉の生活態度に感動し、私もあまりに

悲しまずに前向きに生活することができた。

2020年の年明けから世界的に感染拡大が続いてきた新型コロナウイルスの影響で、おびただしい数の死者が出た。命ははかない。明日はどうなるか誰もが答えられない。できることはたった一つだけ、それは生きる態度を選択することである。今を大事にし、積極的に楽観的な態度でたくましく生きること。それが日本的な考え方であり、命を大切にしたい人々の考え方でもある。

今月は趙姣姣さんのお話でした。「湯を沸かすほどの熱い愛」は名作です。まだ観ていない方は、この機会に是非ご覧ください。

皆さまからのメッセージをお待ちしております！

お知らせ

★4月例会

日時：4月6日（火）18：00～
「川村範行先生のご退職を祝う会」

★JCCA 中国語サロン

日時：4月3日（土）17日（土）14：30～

★日本語広場

4月の日本語広場はお休みです。

★5月例会

5月例会はゴールデンウィークにつきお休みです。

上山学院のお知らせ

今年度はずっと with コロナで歩み続けた一年でしたが、3月18日（木）に無事に上山学院卒業式を行うことが出来ました。コロナで見通しの悪い中、とても頑張った学生たちで、この日を迎えることができ、大変感慨深い式となりました。御来賓は、成田重忠様（上山奨学財団理事）・唐啓山様（日中文化協会理事）・カドカ＝シバラム様（株式会社パナシアジャパン代表、当校のネパールの学生でお世話になっています）の3名の方にご祝辞を頂きました。また今年度から県立高校にいらした上山学院村松副校長（上山奨学財団理事もお願いしています）が加わり、式次第、BGM、卒業証書などをご教示いただき、例年よりやや格式高いセレモニーになりました。

当校が目指す学校はここで終わりではなく、卒業後も学校に遊びに来てくれて、よき相談相手になり、いずれ母国に帰り活躍し、そしていつか卒業生と一緒にビジネスができる日がきたらと毎年願って送り出しております。

さて在校生たちはコロナのため大幅に入学が遅れ、異例のスタートでしたので、おそらく来年卒業できる学生と、もう一年頑張って再来年卒業の学生とに分かれる予定です。さらに新入生も今のところ予定通りの入学は難しい状況で、昨年同様にバラバラの入学が想定される状況です。しかし今年はコロナになり2回目の春なので、昨年より進んだサービスを提供し、なるべく彼らの人生をコロナで遅らせないように新たな取り組みが出来たらと思います。



4月例会案内

「川村範行先生のご退職を祝う会」

日時：4月6日（火）18：00～

場所：中統ビル4階

お食事：お弁当・飲み物

参加費：3,000円

申込期限：**3/30**（葉書・TEL・FAX）

当協会の理事でもある川村範行先生が、今月で名古屋外国語大学をご退職されます。皆さんとお食事しながら、ご退職をお祝いしたいと思います。皆様お誘い合わせの上、是非ご参加ください。

愛・地球発 二胡のふるさと 第16回『桜二胡音楽会』2021

日時：4月4日（日）

14：30開場 15：00開演

場所：名古屋市公会堂（鶴舞公園内）

アクセス：地下鉄鶴舞線「鶴舞駅」

4番出口 徒歩2分

市バス「鶴舞公園前」徒歩3分

鑑賞無料：要整理券

※ 整理券についてはお問合せください

演奏予定曲：「さくら」「花」「崖の上のポニョ」「賽馬（二胡名曲）」など

お問合せ：NPO法人チャン・ビン二胡演奏団

TEL：052-763-1082

編集局

編集局では現在、携帯電話番号、生年月日、E-Mail アドレスのご登録を推奨しています。イベントのご案内、「誕生日の人の言葉」の掲載、WEB サイト更新の通知などに使用致します。china@chuto.co.jp 宛にご送付ください。ニュースレターは、WEB サイトにてカラー版を公開しています。郵送不要の方は「郵送不要」とご連絡ください。



〒460-0008 名古屋市中区栄 4-16-29 中統奨学館

TEL：052-262-1410 FAX：052-262-5036

一般社団法人日中文化協会

編集長 上山耕治